

# 桑下城跡 07

## 現地説明会資料

平成20年2月16日（土）



雪の桑下城

主　　催　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

調査支援　株式会社　シン技術コンサル



## 調査の経過

桑下城跡の調査は、国道363号線の改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課から、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが行っています。

今回は、平成16年度に実施した1次調査に続く、2回目の調査になります。（株）シン技術コンサルの支援を受け、4000㎡ある調査区をA・B区に分け、平成19年9月から20年3月終了予定で実施しています。

## 立地と環境

桑下城跡は、瀬戸市の北東部にある品野盆地の北東、水野川と蟹川にはさまれた標高約210mの丘陵上に立地する平山城で、規模は東西約220m、南北約100mを測ります。

周辺の遺跡で当センターが調査したものとしては、西の低地に上品野蟹川遺跡（縄文～戦国）、東の谷をはさんだ丘陵上に桑下東窯跡（戦国）、さらに東の丘陵斜面に上品野西金地遺跡（縄文～江戸）があります。また、南東の水野川をはさんだ標高約330mの尾根線上に品野城があります。

図1 遺跡位置図（瀬戸市詳細遺跡地図に一部加筆） 1:5000





## 桑下城の歴史

桑下城は、名古屋市の蓬左文庫に古城絵図が残っていることで有名な城ですが、江戸時代の地誌類に、城主は松平内膳の家老永井民部であると書かれている以外詳しいことはわかっていません。

表1 桑下城・品野城関連年表（『瀬戸市史通史編上』より）

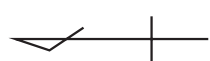
| 西暦（ 年号 ）   | 関 連 事 項                                                  |
|------------|----------------------------------------------------------|
| （文明ごろ）     | 落合城主長江修理進利景、桑下に移る                                        |
| 1482（文明14） | 品野の城主長江（永井）民部、今村の城主松原広長と戦い勝利する                           |
| 1529（享禄2）  | 松平清康（家康の祖父）、品野郷を奪取し、叔父の松平内膳信定（桜井松平家）に与える<br>松平信定、品野城主となる |
|            | 桑下城主長江（永井）民部、松平信定に服属する                                   |
| 1535（天文4）  | 松平清康暗殺にともない内紛がおこる<br>松平清定（信定の子）、品野から引き上げる                |
| 1557（弘治3）  | 今川氏が品野城を管轄する                                             |
| 1558（永禄元）  | 松平家次（信定の孫）が守将として派遣され、織田氏との間で戦闘が行われる                      |
| 1560（永禄3）  | 今川義元、桶狭間の戦いで敗死<br>今川氏、品野城を放棄                             |

品野の地は、美濃・三河国と国境を接し、さらに信濃国に続く中馬街道が通っているため、織田・松平（松平衰退後は今川）の覇権争いの最前線になりました。そのため、桑下城は上品野の集落を見下ろす南側を重視する構造になっています。また、桑下城を館城（平時の城）、品野城を詰め（戦闘時の城）と関連づけて考えています。

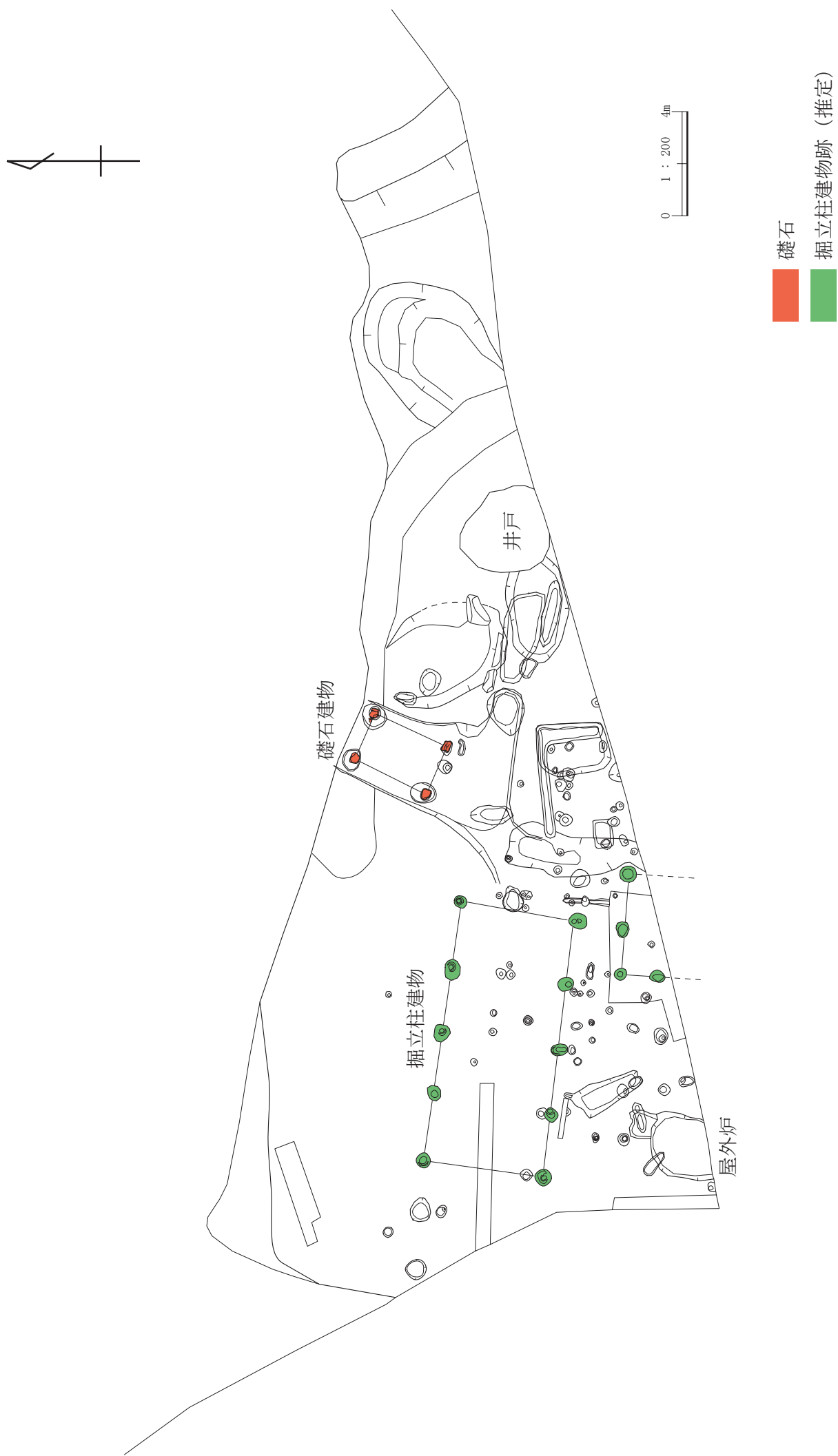


図2 桑下城縄張図（『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ（尾張地区）』より）





遺跡全体図



本丸部分遺構全体図

# 調査の成果

今回の調査は、調査区をA区（本丸の北部分と本丸を囲む堀）とB区（本丸北東方向にある平場と東に続く斜面）に分けて実施しています。

## 1. 検出した主な遺構

### ① 本丸

#### A 掘立柱建物

本丸からは、大小合わせて100近い遺構を検出しました。ほとんどは直径60cm以下の小穴で、その多くは掘立柱建物の柱穴と考えられます。調査区が本丸の北部分に限られているため、全体がわかる建物は、北西の1間×4間の建物のみです。

#### B 礎石建物

本丸北端に1間×1間の礎石建物を検出しました。建物は地表面を一段低く掘り凹めてつくられ、凹みは南西と南東が開いています。これを通路と考えると、この建物は門になります。

#### C 土塁

本丸北東端に残存する土塁の一部を断ち割った結果、土塁は土を盛り上げて作ったのではなく、削り出して作っていることがわかりました。北西端に遺構が見られないことから、ここにも土塁があった可能性があります。

#### D 大型土坑

本丸北東に大小の石、焼き物、炭を含む大型の土坑を4基検出しました。大きな石の中には被熱により赤く変色しているものがあります。これら大小の石は、庭園に使われたものの可能性があります。

#### E 整地層

本丸西端と北東端は平場を作るために土盛されています。西側の土盛りは深いところで2mになります。

### ② 井戸

本丸礎石建物の直下、北の堀との間にある平場で石組みの井戸を検出しました。2本の竹を使って井戸の水を流す仕組みになっています。

### ③ 堀

#### A 本丸を囲む堀

本丸の北・東・西に堀がめぐっていました。東西の堀は薬研堀、北の堀は箱堀になっています。東の堀の外には堀を掘削した時に出た土が土盛りされています。また、北の堀の西側は、削り出しにより土塁状の高まりが作られています。

#### B 竪堀

本丸東の堀より北側で薬研堀を検出したことにより、従来城外と考えられていた北東部の平場も城内になることがわかりました。





調査前全景（北より） 東海環状自動車道により削られている丘陵尾根上に品野城がある



本丸全景（北東より）



礎石建物（南より）



西の堀（薬研堀）断面と北の堀（箱堀）



東の堀（箱堀）断面（奥に薬研堀が続く）



## 2. 出土した遺物

### ① 金属製品

本丸を囲む堀の北東部分から、和鏡が地面に突き刺さった状態で出土しました。和鏡は「菊花双鶴鏡」とよばれる白銅鏡で、14世紀代に京都の工房で製作された優品です。類似品として和歌山県にある熊野速玉大社の古神宝の鏡があります。速玉大社の鏡は明德元（1390）年に調進された品であることがわかっています。遺跡から出土した和鏡でこれだけ保存状態の良い品はほとんどありません。

他には、本丸北側斜面から鉄鏃と小柄が出土しています。

### ② 木製品

堀の中から、漆椀・皿・下駄・柄杓・陽物などの木製品が出土しました。

### ③ 石製品

本丸北側斜面から「氏」「那」「忍」「悉」などの文字が墨で書かれた小石が数点出土しました。他には、堀の北東部分から石臼が出土しています。

### ④ 土器・陶磁器

中国産の青磁碗・白磁皿、常滑産の甕、土師質の皿や内耳鍋などの出土もありますが、ほとんどは播鉢・天目茶碗・皿などの瀬戸産の陶器です。特に匣鉢（さや）や挟み皿などの窯道具の出土が多いのが特徴です。

## まとめ

今回の調査は本丸の一部（北部分）とそれを囲む堀と城の周辺部の調査でしたが、桑下城は従来考えていた以上に、大規模な城であることがわかってきました。本丸に見られた厚さ2mにおよぶ土盛りによる整地や幅12m、深さ4mを測る内堀と堀切（東、西、北）など、当時の土木技術をかいま見ることができました。

現在見られる桑下城跡は、在地領主である長江（永井）氏が当初築いた城ではなく、今川氏が関与した改築した城の可能性が高いと考えられます。

永禄元（1558）年織田信長が品野城を攻撃するが敗退する。

この時織田軍を撃退した武将に感状を今川義元が贈っていることや、堀から出土した『菊花双鶴鏡』が京都の將軍家ゆかりの工房でつくられた可能性が高い優品であることなどから今川氏との関係が窺われます。

永禄三（1560）年桶狭間の戦いで今川義元が敗死。

今川氏が尾張から撤退し、品野城は放棄されます。その後城が利用された痕跡がないことから、廃城が桶狭間の合戦前後と推定されています。

出土陶磁器類の大半が瀬戸窯で焼かれた大窯製品で、Ⅱ期の製品が多いこと等から、その根拠の一つとして新たに付け加えることができました。





柱穴 天目茶碗出土状況



廃棄土坑 円礫出土状況



廃棄土坑 遺物出土状況



石組み井戸



東の堀 遺物出土状況



北の堀 漆碗出土状況



東の堀 和鏡出土状況



東の堀 石臼出土状況





桑下城跡出土和鏡



鏡面に映った  
天目茶碗

[illegible]